



日耳鼻医会 FAXニュース

平成28年10月7日発行 第243号

第41回臨床家フォーラム

「中四国フォーラムin下関」盛会裡に終了

第41回臨床家フォーラム「中四国フォーラムin下関」が9月18日・19日の両日、下関市の海峡メッセ下関で開催された。両日も台風16号の影響で生憎の天気であったが、全国各地より多くの会員・家族・職員の参加の下、盛会裡に終了した。登録者数は161名。

初日のエクスカージョンには24名が参加。また、職員対象の聴力検査実習には15名が参加した。

18日夜の懇親会では小・中学生も参加している下関平家太鼓保存会「勝山会」による和太鼓演奏や下関医療センター耳鼻咽喉科でジャズピアニストの金川英寿先生ひきいるジャズバンドの華麗なる演奏で大いに盛り上がった。懇親会参加者は家族職員も含めて70名。

翌日の全体集会は耳鼻咽喉科ののはなクリニック・兼定啓子先生の「小児難聴と言語聴覚士の雇用に関して」、山口大学山下裕司教授の「臨床に役立つ内耳基礎研究」、光風園病院木下牧子先生の「『死』について考えて見ませんか」の3講演。いずれも山口県の医師の講演で最後まで充実したフォーラムであった。

来年の第42回臨床家フォーラムは前身の医連から数えて創立50周年に当たるため、記念式典も兼ねて7月15・16日、東京の京王プラザホテルで開催される。

◎平成28年度第3回全理事会開かれる

10月2日(日)東京の事務所で第3回全理事会が開かれた。6月26日の代議員会・総会以来以上3ヶ月経ており、また役員改選後の初めての全理事会であった。

庶務報告、第16回日本臨床分科医会代表者会議報告、第41回臨床家フォーラム「中四国フォーラムin下関」報告の後、第42回臨床家フォーラム及び創立50周年記念式典の概要について、平成29年7月15日(土)午後4時半から記念式典ならびに祝賀会を、翌16日(日)9時より午後1時まで第42回臨床家フォーラムをいずれも京王プラザホテルで行う予定にしているとの報告があった。

協議事項では、平成28・29年度役員職務分担及び委員委嘱について承認された後、全国組織の医会設立に対しての日耳鼻医会の今後の対応について協議。理事長からの6月総会後から今日までの詳細な経過報告を元に活発な議論が交わされたが、全員「この機会を失っては学会との関係修復は望めない」という意見で一致した。

11月27日の平成28年度第1回医会長協議会で再度説明の上、医会長等にも改めて理解を求めることにした。

平成28年度第1回医会長協議会のご案内

日時:平成28年11月27日(日) 12:30~15:30

協議会の後、15時45分より懇親会を予定

会場:ベルサール八重洲(東京駅近く)

詳細は後日医会長宛お知らせ致します

■おたふくかぜ仕組み解明、抗ウイルス薬に道

九州大大学院医学研究院等の研究グループは9月27日、流行性耳下腺炎の原因となるムンプスウイルスがヒトの細胞に侵入し、感染する仕組みを解明したと発表した。同院の橋口隆生准教授は「抗ウイルス薬の開発やワクチンの改良につながる」と話している。

グループは、エックス線を使った解析でムンプスウイルス表面にある「糖タンパク質」の構造を解明。コンピューター計算などから細胞表面の「受容体」が3種類の糖からなると突き止めた。糖タンパク質と受容体は「鍵」と「鍵穴」の関係に例えられ、結合によって感染する。これらの構造を明らかにすることで、ウイルスに先回りして「鍵穴」をふさぐ抗ウイルス薬の開発に道を開いた。

また、ワクチン接種を受けたり、以前かかったりした人でも感染する原因の一端も判明した。ウイルスの遺伝子型によって抗体が作用する部位のアミノ酸の配列が異なるため、一度できた抗体が役立たないケースがある。

■医薬品の添付文書に子供の用法用量明示へ

「適応外使用」常態化で データ活用し来年度から

医療用医薬品に関し、子供への用法・用量が示されていないケースが多い状況を受け、厚労省が来年度から、添付文書に用法・用量の目安や、安全に関する情報を記載するよう製薬企業に促すことが分かった。製薬企業による臨床試験(治験)の多くは採算性の問題などから大人のみを対象とし、子供の効果や安全性が確認された薬は非常に少ない。医師の判断で使う「適応外使用」が常態

化しており、医療機関を通じて集めたデータを活用して安全性の確保を目指す。厚労省は既に、国立成育医療研究センター(東京)に「小児医療情報収集システム」を構築。約40医療機関から集めた約14万人分の小児患者に関する医薬品の投与量や投与方法、副作用などの情報をデータベース(DB)化している。

同省は来年度、同センターに医師や薬剤師らによる検討会を設置。DBなどの医薬品の情報を分析した上で、子どもに投与する際の用法・用量などを添付文書に記載するよう製薬企業に促す方針。同省によると、欧米で薬を開発する場合は原則として子どもの治験が義務化されているといい、検討会は海外の文献も参考にするという。

=時の言葉= オートファジー

細胞が自らの内部にある蛋白質などを分解する仕組みで自食作用と呼ばれる。この働きによって、蛋白質はアミノ酸になったり、蛋白質生成の材料に変化したりする。また、不要となった物質や病原体も分解することで、生命活動を維持している。1960年代に大まかな概念が提唱されたが詳細は謎だった。今回ノーベル賞を受賞した大隅氏は、大きな膜でほぼ無差別に不要となった蛋白質などが包み込まれ、その後、分解酵素を含んだ袋と結合し、膜内で蛋白質などがバラバラに分解され、再利用されることを分子レベルで解き明かした。これらは液胞と呼ばれる小器官に蓄積。エネルギー源や自分自身を作る材料として再利用されているとされる。



私たちの使命は
「生きる喜びを、もっと Do more, feel better, live longer」

Do more,
feel better,
live longer

グラクソ・スミスクラインは、科学に根ざしたグローバルヘルスケア企業です。
「生きる喜びを、もっと」を使命に、世界中の人々がより充実して心身ともに健康で長生きできるように、生活の質の向上に全力を尽くしていきます。

グラクソ・スミスクライン株式会社
〒151-8566 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-6-15 GSKビル
http://jp.gsk.com

発行 (特)日本耳鼻咽喉科医会
〒104-0031東京都中央区京橋2-11-8全医協連会館5F
TEL(03)5524-5230 FAX(03)5524-5228
HP: http://www.jenti.or.jp E-mail jimujenti@jenti.or.jp
当会へのご意見ご要望ご提案をお寄せ下さい